



国立大学法人 名古屋大学グローバルCOEプログラム

2011.11  
No.14

## テキスト布置の解釈学的研究と教育

### CONTENTS

- グローバルCOE論文賞 ..... 02
- グローバルCOE国際研究集会 ..... 02
- 教育プログラム 2011年度講義科目の紹介 ..... 03
- 研究活動
  - グローバルCOE講演会 ..... 06
  - オープン・レクチャー ..... 06
  - グローバルCOE研究員ブリーフィング ..... 07
  - 海外出張報告 ..... 08
- Report & Information ..... 08



G I O B A I C O E  
**グローバルCOE論文賞**  
 2011年度第1回

グローバル COE 論文賞に応募いただきありがとうございました。  
 選考委員会での審議の結果、次の論文を顕彰することになりましたので、  
 講評と併せて発表します。

佐々木 稔 (博士課程後期課程1年)

## L'apparition du Spleen moderne—les représentations du chien et de la mort



【講評】 ボードレールは、詩集『悪の華』の刊行6年前の1851年に、11篇の詩を収める小詩集『冥府』を発表した。本論文は、ボードレールがそこではじめて「憂愁」 spleen という語を使用したことに着目し、それまでに詩人が用いていた「憂鬱」

mélancolie とは異なる独特の意味合いを、社会的歴史的な文脈を重視しながら究明しようとしたものである。論者は、この詩集が掲載された「議會通信」紙の政治的性格、詩のなかで用いられている「犬」や「死」などの表現が当時の読者に喚起したであろうイメージ、後年の『悪の華』との異同（とりわけ「犬」が「猫」に、「年老いた詩人の影」

が「年老いた詩人の魂」に書き換えられた点）等を綿密に検討することを通して、民衆と1848年の2月革命と6月暴動、コレラの記憶、それらの舞台としてのパリという表象が浮かび上がってくることを説得力をもって明らかにしている。こうして『冥府』における「憂鬱」という語のもつ社会的政治的な意味合いを、その創作の時点の文脈に寄り添いながら丹念に明らかにした点で本論文は高い評価に値する。「憂愁」に関連する悲観主義的な一連の語彙の微妙なニュアンスの襲に分け入る研究が、ボードレールの詩的世界の現代性や政治的社会的な文脈との関連で、今後いっそう深められていくことが期待される。

松澤和宏 (研究担当サブリダー)



### グローバル COE 国際研究集会

GCOE 第12回 国際研究集会

2011年9月1日(金)ー2日(土)  
 名古屋大学  
 野依記念学術交流館

## 歴史におけるテキスト布置 | Configuration du texte en histoire

グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」は、平成23年9月1日(木)、2日(金)に野依記念学術交流館において、フランス、ドイツ、アメリカ合衆国で活躍する歴史家5名を招いて、「歴史におけるテキスト布置」をテーマとする国際研究集会を開催した。

佐藤彰一拠点リーダーによる挨拶で幕を開けた研究集会初日は、西洋中世の歴史叙述・聖人伝史料に焦点を合わせた三つの報告が行われた。パリ・ソルボンヌ大学のミシェル・ソー氏は、アインハルトが著した聖遺物奉遷記を取り上げ、序文や構成や語りに注目することで作者の執筆方法の独自性と作者を取り巻くコンテクストを明らかにした。プリンストン大学のヘルムート・ライミッツ氏は諸事情ゆえに来日できなかったが、発表原稿を準備してくれた。カロリング期の歴史叙述抜粋集という複数のテキストからなる「テキスト」の社会的論理を実証的に読み解く試み

は、近代的なテキスト理解の再考を促す刺激的な報告であった。立教大学の小澤実氏は、『ハンブルク大司教事績録』の一部をなす司教ウンニの伝記が作品全体のなかで果たした役割を、著者の戦略と絡めながら、明快に浮かび上がらせた。

2日目の午前中は中世初期の法テキストを対象とした。加納は、国王証書の一類型をなすデナリウス方式による解放証書が、国王証書全体のなかでいかなる位置を占めていたかを検討した。ベルリン自由大学のシュテファン・エスターグース氏は、「教会における奴隷解放」に関するコンスタンティヌスの立法が中世初期の法テキストでどのように用いられたかを検討し、コンテクストに応じてその内容が変えられながら、権威として利用されつづけたことを明らかにするとともに、このような前テキストの利用が中世初期社会にとって有していた根本的な意義を強調した。東京大

学の菊地重仁氏は、写本における形態と配置を調査することで、カピトゥラリア・テキストならびにそれを取り巻く文化的・制度的コンテキストの特殊カロリング的な性格を明らかにした。

午後の最初の二つの報告では、社会経済史でしばしば用いられる史料が扱われた。名城大学の西村善矢氏は、中世盛期トスカナ地方の地代リストの形式と内容を調査し、地代リストが二種類に分類できること、そしてこの区分が社会経済的コンテキストに対応していたことを明らかにした。弘前大学の足立孝氏は、ウエスカ司教座聖堂のカルチュレールと証書原本を調査し、索引付きの証書集への収録と原本の形態での保管の違いが、ある家門が自己を再構築するための戦略に由来する可能性を指摘した。続いて行われたパリ西大学のフランソワ・ブガル氏の報告は、聖ペトロの名で書かれた教皇ステファヌス2世の書簡を、活喩法の観点から考察した独創的な研究である。当時の政治的なコンテキストだけでなく、近代に入ってからこの書簡の解釈、古代的な修辞法の変遷など多岐にわたる重要な側



面に論及し、まさに研究集会のテーマに即した報告であった。掉尾を飾ったパリ・ソルボンヌ大学のイヴ・サシエ氏の報告は、12世紀初頭に成立したある政治論考における引用の仕方に着目したものである。著者のユグ・ド・フルリーが、カロリング期の著述家とは異なり、権威となる作品を引く際に、決して名前を挙げることなく、自分の議論に組み入れていることを論証し、この作法が叙任権闘争という当時のコンテキストと関連していたことを証明した。

甚大な被害をもたらした台風12号の接近のため、参加者数は決して多くはなかったものの、各報告後には活発な議論が交わされ、実り豊かな研究集会となった。

文責：加納 修（グローバル COE 事業推進担当者）



## 講義科目の紹介

2008年度に大学院博士後期課程に入学した方からは、課程博士論文を執筆して学位を取得するにあたりグローバル COE が開講する授業科目から「テキスト布置解釈学原論」と「テキスト布置解釈学各論」を各2単位修得することが必要です。またこれらの授業への登録はグローバル COE プログラムが推進する二つの事業に応募する際の条件となっています。2008年度より前に大学院博士後期課程に入学した方についても、グローバル COE 授業科目に登録し履修していることが、グローバル COE 論文賞および大学院学生海外派遣事業に応募する際の条件となっています。開講科目の詳細についてはグローバル COE の Web ページからご覧ください。

### テキスト布置解釈学原論 [前期]

森際康友 教授（法哲学・法曹倫理）

2011年6月9日(困)・16日(困)

## A Glimpse of the Epistemic Background of Textual Interpretation

On 9 and 16 June, 2011, Professor MORIGIWA Yasutomo gave two lectures on the general characteristics of textual interpretation. The first lecture explained why the so-called “linguistic turn” in philosophy was a breakthrough in modern philosophy. By shifting the focus from consciousness to language, what was hidden in the two-termed epistemic scheme of a subject knowing something about the object became apparent. The missing third term was language, the medium that transmits information from the speaker/writer to the hearer/reader. The hearer/reader becomes part of the integral scheme of knowing. Knowing involves expressing knowledge. Contrary to intuition, the “Ah-ha Erlebnis” is an incomplete part of the activity of knowing. A new

way of looking at the phenomenon of knowledge is thus introduced.

The second lecture introduced Prof. MORIGIWA’s theory of interpretation and legal interpretation as developed in the book that grew out of a GCOE international symposium he had organized and held at the *École Normale Supérieure* in Paris: *Legal Interpretation in the Age of Enlightenment* (edited by Morigiwa Yasutomo, Michael Stolleis and Jean-Louis Halpérin, Dordrecht: Springer, 2011). His paper, called “Interpretation by Another Name,” argued for interpretation as augmenting knowledge. Interpretations are of something. In the case where the object of interpretation is the text, the literal meaning of

the text provides some ground of constraint for the range of possible interpretations. How is this possible? Analysis of the practice of interpretation makes clear how the establishment of the *identity* of the text, the object of interpretation, and the *change* of its interpretation are simultaneously possible.

When the theory is applied to legal texts, it can explain how “that which makes the *identity* of the object of legal interpretation possible, gives *authority* to the law; that which makes *change* possible in law brings about *justice* according to the law” (p. 125, italics added).

釘貫 亨 教授 (日本語学)

2011年6月23日(木)・30日(木)

## The Genealogy of Kyoyo-ism in Modern Japanese Language Studies

Kyoyo-ism was individual action that had been profoundly influenced the progress spirits of young intellectuals from beginning of 20th century to the eighties era in Japan. The notion of Kyoyo-ism had been derived from “Bildungsroman” of German literature. But there is no suitable equivalent in English to Japanese term Kyoyosyugi (教養主義). Therefore I used in this lecture, the original term “Kyoyo-ism”.

I have noticed the studies of Yamada Yoshio (山田孝雄), Arisaka Hideyo (有坂秀世), Okuda Yasuo (奥田靖雄). They have achieved the individual works in modern Japanese linguistics. I found the influences in their achievements from outside of western linguistics. That is metaphysics of Kant, for Yamada, phenomenology of Husserl, for Tokieda and Arisaka, Marxian economics for Okuda. They have backgrounds of different ages and ideologies. German metaphysics and Marxism had formed the current that had supposed students' education from second half of Meiji period to first half of Showa period. That is the Kyoyo-ism which had supported a lot for radical questions of young intellectuals. They say “What are existences of things?”, “How do we recognize of existences of things?”, “How do we solve social contradiction?”, “How do the solutions of social contradictions concern with our studies?”

Yamada, Tokieda, Arisaka authorized their traditional studies based on western philosophy for opposing to new western linguistic theory. Okuda authorized his theory by Marxism for opposing to the school grammar of establishment and academic Japanese language studies indulging to philological history of Japanese. Persuasion of his theory had been based on confidence about existences of words and individual demonstration. It is a long time since peoples say Kyoyo-ism ended. This is a same time for global decline of Marxism and communist states. When we estimate the Kyokaken grammarians (教科研文法派) in whom Okuda had leaved, about the viewpoint of historical Japanese language studies, we can judge them the last challengers of Japanese language studies based on Kyoyo-ism. In addition to exit of Marxism, Kyoyo-ism in modern Japan faded out. In other words, we should live on the midst of lonely special information. However the linguistics in Europe had leaved German characterized culture since F.de Saussure and H. Sweet. From the time to now, in western linguistics, essential studies on origin of language have faded out. These facts have brought conspicuously elaborate descriptions to linguistics. However such technique-oriented descriptions often impressed people with strange looking emptiness.

### テキスト布置解釈学各論

**各論** 宮地朝子/クレール・フォヴェルグ/重見晋也 ● 授業担当者によるケーススタディの提示を踏まえ、受講生を含む全体で討論を行った。議論はパラテキストの規定や布置構造における位置づけの再検討から、解釈という営みとの関係性に展開し、文書テキストを対象としない分野での援用可能性にも及んで以下のような整理に至った。

パラテキストは、①テキストを前提とし、その本文以外の構成要素や外形的特徴として把握され、②テキストと同じ空間において (例えば書物テキストであれば書誌的要素として) テキストの性質 (ジャンルなど) を規定し方向付

けると同時に、③ (テキストの内部要素だからこそ) テキストとテキストの外界を結ぶ物理的なインターフェイスとして機能するものと整理できる。この見方は、各の側面、例えば③に注目して時空間を共にしない副次的テキスト (対談、批評者宛ての手紙など) をパラテキストとする分析を妨げないが、②を典型とすることで、コンテキストやメタテキストといった布置構造上の他の要素との対立も、個別の有用性も明晰化する。

パラテキストは、書誌的要素がジャンルの明示と差別化に直結すると同時に出版を含むメディアやその技術の進展

と不可分であるように、社会的あるいは文化的・歴史的に条件付けられ、テキスト解釈の方向付けに大きく関与する。分析対象＝テキストである以上、原理的にはパラテキストなしの分析解釈も可能であるが、解釈者・分析者や関連テキスト、公共や個々の読者といった外界と、テキストを結ぶ“関”は不可避ともいえる。

テキストの主体による操作性の大きな要素（筆名等）もある一方、その成否は解釈者の先入見や参照情報、コンテキストなどに左右される。また、中心的テキストが解釈者・

分析者の問題関心によって決定づけられる故に、一般にはパラテキストと見なされる要素（例えば、欄外の書き入れや映画の字幕等）をテキストとして分析することも可能であり、その場合、本文テキストがその解釈を方向付け外界との関となるパラテキストともなりうる。

パラテキストは、テキストの解釈や分析の動的な有り様を把握説明する重要な一観点となる。以上のような整理と観点としての明示化は、解釈学モデルの進展にも寄与する。

## 各論 V

**高橋 亨** ● 『源氏物語の詩学—かな物語の生成と心的遠近法』（名古屋大学出版会）の「序論」を素材として、『古今集』かな序を中心とした「言の葉」生成の文学観とその意義について論じまた討議した。まず、1970年代以降の「テキスト論」の理論的背景を概説し、その中で、論者が「テキスト引用関連」を主として『源氏物語』など平安朝日本文学研究を展開してきたことを説明した。次いで、コトバを「言葉」と表記したり「言の葉」と歌語表現することが平安朝以後に始まり、その「種」「葉」「花」「実」など植物生成をめぐる喩が日本の伝統的な文学論および文化論を形成してきたことについて、具体例に則して論じた。こと

に、「述志」の文学としての中国における文学観との共通性と差異については、中国人留学生を含む大学院生たちとの討論が有意義であった。

また、ウィーン工芸博物館（MAK）蔵で新出の『源氏物語絵詞画帖』については、その若菜上・下巻の場面選択と詞書の特異性について、他の多くの詞書を伴った源氏絵資料との比較検討資料に基づいて、その文化コンテキストを中心としたテキスト論の例として論じた。これはまた、導入において用いた源氏絵と『源氏物語』の「後宮」をめぐる国際比較の視座とも対応している。

## 各論 VI

**ブライアン・カレン** 名古屋工業大学准教授 ● Graduate students face a variety of writing tasks as they work towards their chosen degrees. Naturally, these tasks will vary from one degree program to another. They are however, similar in two respects. First, the tasks become progressively more complex and demanding the further you go in the program. Second (with few exceptions), they need to be written “academically.” This course focuses on the writing tasks that may be required in a graduate career.

The chosen textbook is “Academic Writing for Graduate Students” by John M. Swales and Christine B. Feak, both highly respected experts in the field of academic writing. While the textbook is not specifically aimed at non-native speakers of English, the authors’ long experience in the field of English for Academic Purposes is well demonstrated in the book by their clear examples and careful scaffolding of language that is useful for both the native speaker and the non-native speaker reader.

The course follows a task-based methodology in achieving the following goals:

- Understanding the intended audience, the purpose of the paper, and academic genres.
- Engaging in analytic group discussion
- Genre consciousness-raising
- Writing summaries and critiques

- Language focus sections that address linguistic elements as they affect the wider rhetorical objectives
  - Help students position themselves as junior scholars in their academic communities
  - Develop goal-setting skills
  - Provide a rationale and a forum for writing academic papers
- The end of semester project involved writing a 5,000 word paper related to the theme of the students’ own PhD research. All of the students were able to successfully complete this challenging task, and it allowed them to explore their own research in an unthreatening environment. Students chose to utilize this assignment in a number of ways. One of the students used the assignment to explore a particular area of her future PhD analysis. Another student utilized it to write an introduction to his entire PhD thesis and thus to help him organize the overall structure of the work. In both cases, the students reported that the assignment helped them to focus their thoughts greatly and to make considerable progress in their overall research projects.

In addition to the writing assignments and exercises, the students also engaged in presentations and goal-setting exercises. During the semester, each student had four chances to make a presentation, culminating in the final presentation on the same topic as their paper.



## グローバル COE 講演会

## 歴史と画像 Visualizing Cultures

“Visualizing Cultures”は、従来文字資料に依拠した議論を主体として展開してきた歴史学に対し、絵画や写真のような視覚資料の分析を中心に据えたアプローチを提示しようとする本格的で大規模な試みであり、今回の講演者である宮川繁教授と、ピューリッツァー賞を受賞した著書『敗北を抱きしめて』等で知られる歴史学者、ジョン・W・ダワー教授が主導する共同プロジェクトとして、2002年マサチューセッツ工科大学に於いて開始された。以来、同プロジェクトは現在に至るまで継続的な発展を遂げてきており、より多くの美術館等との提携を進めることで利用可能な画像データもますます充実したものとなっている。また、画像と文字情報の有機的な連携を可能とするウェブの特長を最大限に利用し、体系的に閲覧可能な形で公表されているその成果の蓄積は、今日では参照が容易で有用な資料として、多くの機関に於いて研究・教育目的で広く利用されるに至っている。

宮川 繁 教授  
マサチューセッツ工科大学



2011年7月7日 14時—15時30分  
使用言語：日本語

本講演では、中心人物の一人である宮川教授本人から、同プロジェクトの目的や理念、遂行上の方針や最新の進捗状況等についての概略が語られた他、異文化間の接触や近代アジア史を中心的な対象分野とすることから、ペリー来航に際して日本人及びアメリカ人によって描かれた絵画等を実際に幾つか取り上げ、そこから読み取り得ることの解説を通して、この日米双方にとって異文化との大いなる出会いだったであろう事件を当時の両国の人々が如何に捉えていたか、様々な手掛かりが得られることが示された。また、2年間に亘った日露戦争に関する報道を観察すると、初年度の記事には専ら絵画が添えられていたものが、次年度には殆ど写真に置き換わっており、このことが、絵画から写真へという報道に於ける使用メディアの推移が、この時期にしかも急速に進んだことを反映しているとの興味深い指摘もなされた。

(文責：前澤大樹)



## オープン・レクチャー

研究成果を社会に広く還元することを目的として、名古屋大学文学研究科グローバル COE プログラムでは21世紀 COE プログラムに引き続き「オープン・レクチャー」と題する公開講座を開催しています。毎月1回水曜日の18時から、グローバル COE が名古屋国際センタービルの15階に開設しているグローバル COE オフィスで、「テキスト布置解釈学」に関連するテーマでの講演を、事業推進担当の先生やその他の先生がレクチャーします。参加は自由です。毎回の題目などはWebサイトでお知らせしています。本号では2011年7月以降に開催した2回の要旨を紹介します。

第39回

## 仮名遣いと古代日本語

釘貫 亨 教授 (名古屋大学大学院文学研究科・日本語学)

2011年7月20日 18時—19時30分

仮名遣いは、鎌倉時代以来「定家仮名遣い」として堂上系歌学における絶対的規範として近世中頃まで伝承されたが、万葉集の注釈家である大坂の契沖が定家仮名遣いの伝承と自ら経験した上代の仮名用法の齟齬に苦慮し、『和字正濫鈔』(1695)を著して「天曆以往」の上代仮名を基準にした新仮名遣いの提案をなした。その際、契沖は従来のいろは歌による説明に変えて「五十音図」をその枠組みとした。その結果、仮名遣いで問題が生ずる「いひる」「えへゑ」「をほお」の仮名群が音図に規則的に分布することが判明し、仮名遣いとはつづり字の規範問題だけでなく、古代日本語の音声の実態を反映する問題であるという歴史の本質に関する推測が浮かび上がった。仮名遣いは、「仮

名遣い論」として古代日本語音声の再建という学理的問題に展開した。音韻学者の論争の中心は五十音図のア行ヤ行ワ行の再建にあった。特にヤ行とワ行は「ヤ■ユ■ヨ」「ワ■ヱヲ」のような独特のゆがみを形成しているため、該当の仮名の位置の背後にも音声が存在したのではないかという理論的仮説(喉音三行弁)をめぐって論争が交わされた。本居宣長は、『万葉集』の字余りの法則から古代語においてア行音が a i u e o のような単独母音であったという結論を得て、ヤ行音 ya yi yu ye yo ワ行音 wa wi wu wo という合理的な音価推定に到達した。宣長の理論的予言に基づいて後に奥村栄実は、ヤ行「延 ye」の存在を論証した。

第40回

## 時間・事件・テキスト——解釈学の挑戦——

2011年9月28日(木)  
18時—19時30分

佐藤彰一 特任教授 (名古屋大学大学院文学研究科・西洋史学)

歴史テキストにおいて、時間の問題は、歴史学がどのようにして文字記録を解釈し、そこに意味を読み込んで行くかということと切り離せない根源的な価値を持っている。報告はテキスト論を基本的な背景として、時間論と事件論を2本の柱として進めた。伝統的な文献学的解釈学が、現象学哲学との出会いによって、今日の解釈学に脱皮したことはよく知られているが、P・リクルの議論が『時間と物語』に体现され、時間を焦点化しているのに対して、H・G・ガダマーの解釈学は時間論への傾斜は極めて限られている。後者における時間論の希薄な側面を補強したのは、ハイデルベルグ大学でガダマーに学んだ歴史家ラインハル

ト・コゼレックであった。コゼレックのメタ・歴史範疇(その内容は時間の推移のなかで変化する)「経験の空間」と「期待の地平」論を紹介し、18世紀の啓蒙思想の浸透の中で、過去に属する「経験の空間」が縮小し、「進歩」を旗印にした「期待の地平」拡張されるという重要な変化が生まれたこと、また認知・知覚論において論じられる時間の非連続な積層性という形式の、歴史時間論上の問題に關説し、さらに「事件」と形容される事柄が、因果関係の帰結ではなく、事後に生まれる「後生的」な事柄であるとするミシェル・ド・セルトーに主導された、近年のフランス史学における認識論的転換を紹介した。



## グローバルCOE 研究員 ブリーフィング ⑬

グローバルCOEのポスト・ドクトラル研究員は、個別の専門領域で扱っている研究対象をテキスト布置解釈学の枠組みで捉え直すべく、名古屋国際センターのグローバルCOEオフィスを中心に研究活動を行っています。研究員たちの研究成果は「研究員ブリーフィング」と呼ばれる事業推進担当者と研究員が集う場で議論され、研究論文へと結実していきます。

### 内田智秀 ● 『叡知と運命』 から見る 『青い鳥』 の幸福について

『青い鳥』(1908年)創作前から、モーリス・メーテルリンクは『叡知と運命』(1898年)の中で幸福について論じていた。劇作家にとって幸福とは心の中で起る現象であり、さらに劇作家は知性よりも道徳を重んじ、そして運命が私たちに襲いかかったとしても、幸福になろうとする希望を持つことが大切だと考えていた。構想手帳の『青い鳥』の執筆順序の分析から『叡知と運命』の実践の場として『青い鳥』を位置づけることが可能である。しかしそれでは主人公チルチル

は叡知を得ただけで、彼の身の回りは何一つ変化していないことになる。ところが構想段階では、旅を終えたチルチルが現実世界で幸福を手にしたと思われる断片がある。病から回復した娘とチルチルが抱擁する構想の中に、突如未来のチルチルの息子が登場する。この抱擁と息子の登場は、幸福と恋愛という二つの主題を結びつける。この二人の愛は初版や最終版では沈黙の裡に含んでいると思われる。

### 深津周太 ● 連体詞「ちょっとした」の成立——情態副詞の程度副詞化が引き起こす一現象——

本発表では、連体詞「ちょっとした」の成立が、そもそもは「さらっとした感触」「はっとした表情」のような[擬態語+とした[NP]]型の連体修飾表現に端を発するものであることを主張した。その契機として、[擬態語+と]型的情態副詞「そっと」が程度副詞へと変化したことが挙げられる。この変化により、[擬態語+とした[NP]]型の「そっとした」が、[程度副詞+した[NP]]という構造へと再分析さ

れ、その後、同じく情態副詞から程度副詞へと変化した「ちょっと」が後者の構造へと埋め込まれた結果、「ちょっとした」が生じたものと考えられる。このような経緯を想定すれば、現代語における「ちょっとした」が[擬態語+とした]型の連体修飾表現と同形態でありながら、〈程度〉の意味を表わすという矛盾が解消されることとなる。

## 竹島/独島研究に関する文献調査と意見交換

池内 敏

韓国国立中央図書館・東北亜歴史財団独島研究所、7月31日～8月4日  
今回の文献調査では、①「サンフランシスコ講和条約」とりわけ「その領土条項」に関わる最新の研究成果について検討することを意図した。また、②当該条約の解釈と関わって重要と思われる「1905年前後における竹島/独島の利用実態」に関わる近年の研究を再検討することも意図した。そこでまず、韓国国立中央図書館にて竹島/独島関連の最新の研究を検索・閲覧し、必要なものについては複写採録した。

また、1日と3日には、中央図書館での作業を終えてのちに東北亜歴史財団独島研究所を訪問し、所長はじめ所員の方々と情報交換・意見交換を行った。そのなかで、上述の①に関わって、李碩祐仁荷大学校法科大学教授が近年述べている「サンフランシスコ講和条約の領土条項の記述それ自体は、竹島が日本領であること

を示す」とする見解が韓国内（および韓国の関連学会）でどのように評価されているか伺った。「李碩祐教授は、韓国の独島研究に関わる国際法研究者としてたいへん高名だが、そうした主張については知らなかった。またそうした主張は現在の韓国では受け入れられないだろう。」というのが研究所側から得られた当初の応答であった。帰国後、李碩祐教授の主張を（池内の述べたとおりであると）確認したこと、それをどう評価するかについては少し時間がほしいとの連絡を受けた。

また、研究所では、上述の②にかかわる韓国研究者による最新の研究（近刊予定）について教示を得て、同論考で使用されている池内未検討の史料（1960年代韓国の新聞記事）を中央図書館所蔵マイクロフィルムのなかから検索し、入手した。

（事業推進担当者・日本史学）

## 第九回国際ライプニッツ会議での発表

クレール・フォヴェルグ

2011年9月26日より10月1日までドイツ・ハノーファーのライプニッツ大学で開催された「ライプニッツ協会（Gottfried-Wilhelm-Leibniz-Gesellschaft）」主催の第九回国際ライプニッツ会議に出席し、研究発表を行った。会議の全体テーマは「自然と主観」であった。私は、ライプニッツとロックの関係を議題にしたセッションにおいて、『人間知性新論』における自然と不安」と題して発表を行った。

「国際ライプニッツ会議」（Internationaler Leibniz-Kongress）は、5～6年に一度、全世界のライプニッツ研究者が一堂に会するものであるが、私には今回が初めての経験である。この度の会議には、2009年に設立された日本ライプニッツ協会から11名もの会員が参加し、それぞれ発表を行った。また本会議に先立ち、9月21日～9月25日には、ハノーファー大学ライプニッツ基金講座主催による初めての「博士論文執筆予定者のための国際研究集会」が開催されたが、ここにも日本ライプニッツ協会から博士後期課程の2名の会員が参加し、発表を行った。さらに、本会議には「ライプニッツと日本」というセッションが設けられ、ここでの日本ライプニッツ協会会員5名による発表はすべてドイツ語で行われた。日本のライプニッツ研究者の海外活動がうかがわれ、感服した。というのも、フランスではライプニッツ協会はまだ存在せず、ようやく「ライプニッツ研究センター」の開設準備が始まったばかりだからである。

『人間知性新論』における自然と不安」と題した私の発表は、テキスト布置の解釈学的研究に属する内容でもある。ロック著

『人間知性論』がフランス語に翻訳されたことによって、「不安（Uneasiness）」は、マルブランシュの概念としても知られていた「不安（Inquiétude）」としてフランス語圏の読者に解釈された。さらにロックが論じていた心理的な次元に留まる不安は、『人間知性新論』においては、形而上学的な意義を含む Inquiétude の概念として、ライプニッツによって再定義され、その後『自然の解釈に関する思索』においてデイドロによっても再定義されたという解釈の流れを背景にして、私は、ライプニッツが論じた「不安」と「自然」の両概念の関係を主題とした。

この度の国際ライプニッツ会議の会場は、ハノーファーのヘレンハウゼン宮のすぐ北隣にあって、ライプニッツがここで1695年頃、「現実に存在するものは全て異なる」という、principium identitatis indiscernibilium の原理を教えた、と伝えられる宮廷庭園にも立ち寄ることができて有意義だった。優れた意味で極めて「国際的」だった同会議で得られた多様な知見を、今後は、グローバル COE の論集や研究会における発表などに活かして行きたいと思う。

（事業推進担当者・

グローバル COE 特任准教授）



ヘレンハウゼン宮廷庭園ライプニッツ寺院にてライプニッツ・ロックのセッション発表者

## 事務局からのお知らせ

## ■第42回オープン・レクチャー

グローバル COE プログラムの開始から国際センタービル15階にある学外オフィスを会場にして開催してきたオープン・レクチャーが、次回をもって国際センターでの最後の開催となります。皆様のご参加をお待ちしております。

講演者：松澤和宏（研究担当サプリーダー・フランス文学教授）

題目：「言語とテキストの解釈学」

日時：2011年11月30日(水)18時～

場所：国際センター15階グローバル COE オフィス

## ■第13回国際研究集会

名古屋大学文学研究科グローバル COE プログラムが国内外で主催してきた国際研究集会も次回で13回を数えます。松澤和宏教授が組織しプログラム全体を総括する国際研究集会を下記の通り予定しています。詳細については Web でご確認ください。

第13回グローバル COE 国際研究集会

「哲学的解釈学からテキスト解釈学へ」

日時：2011年12月9日(金)～11日(日)

場所：名古屋大学文系総合館7階カンファレンスホール  
および法学部棟 906 号室